

竹内農場西洋館のレンガ

深谷市教育委員会 幾島 審

龍ヶ崎市の調査で、西洋館に使われているレンガは埼玉県深谷市にあった「日本煉瓦製造株式会社」製のものということがわかりました。日本におけるレンガの歴史と西洋館のレンガについて、深谷市で文化財行政に携わっている幾島審さんにお話いただきます。

刻印からレンガ製造会社が判明

茨城県龍ヶ崎市若柴町に所在する竹内農場西洋館（大正9（1920）年）建設で使われているレンガは、平成28（2016）年9月から龍ヶ崎市によって実施された調査で、建物に使用されているレンガより機械成形で楕円の中に上敷免製という刻印（写真4）が押されているものが発見されたことから、埼玉県深谷市上敷免にあった日本煉瓦製造株式会社（以下、日本煉瓦）で製造されたレンガであることがわかりました。

日本煉瓦製レンガの特徴

日本煉瓦は、明治20（1887）年10月に埼玉県榛沢郡上敷免村（現在の深谷市上敷免）に、東京日比谷の官庁街に均質なレンガを大量に供給することを目的として、榛沢郡血洗島村（現在の深谷市血洗島）出身の実業家である渋沢栄一（写真1）や、千葉でレンガ製造に関係し千葉県会議長など政財界で活躍していた池田栄亮、東京のレンガ工場の経営者である隅山尚徳、三井財閥の益田孝など5人が20万円を出資して創立され、翌年秋からレンガの製造を始めました。

それまでのレンガは、木製の木枠に粘土を入れて素地を作る手抜き成形といわれる製造方法で、焼成は瓦を焼くだるま窯や陶磁器を焼く登窯などで行われていたので大量に均質なレンガを製造することはできませんでした。日本煉瓦ではドイツから機械式の素地成形機を



写真1（左上）日本煉瓦製造初代会長 渋沢栄一。 2（右上） 諸井恒平。 3、4（左下）「上敷免製」刻印と西洋館で見つかった刻印。 5（右下）『煉瓦要説』



輸入し、焼成する窯には半永久的にレンガを焼くことができるドイツで考案されたホフマン輪窯を導入して、日本で初めて機械製レンガの大量生産を可能にしました。

日本煉瓦で製造されたレンガの特徴は、機械成形で、製造されたレンガの平の面にはピアノ線で切り離された痕があり、縮緬皺と呼ばれています。すべてのレンガではありませんが、平の面に刻印が押されているものもあります。刻印には幾つか種類があり、代表的なものは、楕円の中に横方向の「上敷免製」、「日煉」（写真7）、縦方向の「日本」（写真8）と書かれています。刻印の時期は、「上敷免製」が明治時代、「日煉」が大

正時代、「日本」が昭和時代とされていますが、今回の竹内農場西洋館など大正時代に建てられた建造物からも「上敷免製」の刻印レンガが見つかることから、刻印の細かい時期については、今後の研究課題です。また、小口面に社章が刻印されているものもあります。

日本煉瓦で製造されたレンガは、東京を中心に東日本各地のレンガ建造物で使用されています。渋沢栄一の後、取締役や会長を歴任した諸井恒平（写真2）が明治35（1902）年に記した『煉瓦要説』（写真4）の中に、その頃までに使用された建物や建造物が列挙されており、現在、残っているものを上げると以下のとおりです。

東宮御所（現迎賓館赤坂離宮）、司法省（現法務省旧本館）、日本銀行（現日本銀行本店本館）、横浜正金銀行（現神奈川県立歴史博物館）、京都郵便電信局（現京都中京郵便局）、奉獻美術館（現東京国立博物館表慶館）、日本鉄道大宮工場（現JR東日本大宮工場）、碓氷アプト式（現旧碓氷峠鉄道施設）、山形線（現JR東日本奥羽本（南）線）、中央線（現JR東日本中央本（東）線）、篠ノ井線（現JR東日本篠ノ井線）、日本鉄道線（現JR東日本山手線）など。

それ以降に造られたものとしては、東京駅丸の内駅本屋（大正3（1914）年）建設や竹内農場西洋館（大正9（1920）年）建設などがあります。この他、刻印が確認できないものの、機械成形のレンガが使用されていることや建造物の所在地などから、日本煉瓦を使用している可能性が高いレンガ建造物は多数あります。現在文献や実物資料において使用例が確認されている都道府県は、北海道、岩手、宮城、山形、茨城、群馬、埼玉、東京、神奈川、新潟、長野、静岡、京都となります。

関東大震災後レンガの需要が減少

「上敷免製」の刻印レンガが確認されている建物は多数あるものの、その後使われたとされる「日煉」、「日本」の刻印レンガを使用している建物はほとんど認められません。「日煉」の刻印レンガは、横須賀市の旧海軍の建物などでも見つかっていますが、当初建てられた部分ではなく、増築部分などに使われているのがほとん



写真6（左） 最盛期の工場の様子。明治40（1907）年頃。
7（右上） 「日煉」刻印。 8（右下） 「日本」刻印。

どです。「日本」の刻印レンガは、建物の外壁などで使われていたものもありますが、主体的に使われているものではありません。関東大震災によって浅草十二階などのレンガ建造物が多数倒壊したことを受けて、レンガが使われなくなったことが影響していると考えられます。

関東大震災以降、レンガの需要が減少していき、現在残っている6号窯（写真6）での生産は昭和43（1968）年で終了しました。昭和55（1980）年にはホフマン輪窯6号窯と木造洋館、所蔵資料が埼玉県有形文化財に指定され、平成8（1996）年には日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設（ホフマン輪窯6号窯、木造洋館、旧変電室、備前渠鉄橋）が国の重要文化財に指定されました。その後もレンガやセラミックを生産していたのですが、平成18（2006）年に会社を解散し、その約120年の歴史に幕を下ろしました。

解散後、日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設（ホフマン輪窯6号窯、木造洋館、旧変電室、備前渠鉄橋）は深谷市に寄贈され、その管理のもと、一般に公開されています。また、平成31（2019）年には所蔵資料が埼玉県の有形文化財に指定されました。現在、文化庁の指導のもと、平成25（2013）年度より保存活用計画の策定、調査工事を経て、ホフマン輪窯6号窯の修理工事に入っており、その後、木造洋館、備前渠鉄橋などの修理を行い、すべてが完成するのは令和7（2025）年頃の予定です。

（写真提供：深谷市教育委員会 ※写真4は当NPO法人）

（文 いくしま・あきら）